



少年錄  
二編  
三

^ 13  
3567  
8





門 13  
號 3567  
卷 8

近世説美少年録第二輯卷之三

東都 曲亭主人編次



苦雨初霽殘花春遇

樂地空一色赤繩更繫

再説彼武士の友人と共侶の酔ふ候鯖樓を去る時獨猛の立婦を  
主人を招き其程一夥の武士俟候堪を嗤ひ言ひ倭燈を扇拍子を  
合ふ。河原の添中もく隨の間遙かりけり。有如之程は是首の密安の相譚  
濟して又遠く立出外間跪居る後者ぞえりて誘とぞる前路の追者ん  
とく走りて生醉本性素い。腰の帯を両口の刀の諸をけけ居の鞞脱らせ  
トとどめる。既小く疾鯖樓の日の京の暇の折主人の妻を身邊に抱き  
奮小彼客のれ。絆如此々と其示と休の議と何と也。若と試み

美少年録第二輯卷之三

早稲田 大學 図書館  
昭 34.6.3 受  
藏 書







人小あつて。吾侪にまされしものあれ珠之が為りあるが推辞をせざるも人の底  
 意の測りぬかり。よき問質と後小をと深念と頭を擡て必ひるる縁を  
 ぬら執持をひまるとも耳よりの執ひ然と宿所も告られ名を定むる  
 らる初見参の酒與ふ乗せ浮る言小はくまるとよ小主人の膝推向けてあれが  
 ことそのるれ俺をも彼客人を何処の誰と知らされ今こそ妻の説小一  
 條のまをての媒妁をせざるも且夢後後段あり叔彼人のいままの某渠を  
 は初く。眷恋をかくも頼む小あを渠の舊縁あり。相別れよ既小を  
 十稔あまのふまうしつご心ともく面忘れと迭小知らぬわけ小阿夏との名心は  
 びく。熟視れが看る隨小をせしと夢よりあり。渠のふくあ地小来く又歌妓小  
 るるるちえん問まの疑ひ解るあり。と必ひけれと席上小大く醉ふ屋友人ありて便  
 宜をぬされ黙止り。ゆると猶疑く渠云云とのるあぶあれらのよと傳へるひは

此合まのあべし。とらるる推辞をせし。その美いあらゆひへとも阿夏やと総  
 角多男児ありと博労町客店小今有客の債のまはるる。客の債のまはるる。客の債のまはるる。  
 美いゆと問ま果て彼人完小とうち笑てをを聊の戦のまをふのふりを美  
 引く左の右のせぬ術ありよく誘へくぬり。これ宿所へまうく今宵亦  
 来く回答と夢ん只管馮心むとのれり。有如之者酒與ふ乗されし浮る言小  
 あぶらとと必ひよとてつ妻小と告商量く言のあま及るは只是你の為  
 小もがると妻小のれれれもあ人と後々まの吉凶の神る小身の測りぬかり。みづ  
 か擇まひひと妻共何小真実とて耳に示まをちせり。阿夏の頭を傾けて  
 彼人立女小舊縁ありとのれれ誰のありけん早あを必ひゆどもを又對面せん  
 折小問の定ふゆへ。然る頼り人るる。おん媒妁を願ひゆりとの小夫婦を欽  
 びく。る不彼人の噂とされ影さま窓の梅の花春の横目の暖光黄昏近くる小











とむろの雲時辭も奈未と民の甲斐ある今宵の再會小疾初疑ひは心地  
 解一送の勢元四郎の猶声を微りく喃阿夏傳は十の稔ふる思ひ  
 良人小伴れ四首の子共を携て録倉へと啓行ぬと人の噂も聞ゆるよの地へ來つ  
 るの陶氏小再あるとさびるん彼木偶女のいふるる継子の小夏は恙なれ故を  
 あらぬふとやと問う阿夏は涙をてめさく薄命ある年の來の艱難幼勞を  
 告まうせんは雲の面をほれも花の洛小住びくま平比足引の山拵き暴悪  
 雄のぞろ禍支小あま路ゆく木偶女も彼小夏を命をさるるゆら妾小測小力を  
 免れて尚仙は珠之文を鞠の音一千辛萬苦の言一朝小盡すつらりかて介後情  
 の里人の家小身を寓せ去歲まで其処ははるあは舊里あると京師中満心  
 親類もかん身中知られる情由ははれ陶氏小あま珠之文が久後とらととと  
 路遙を盤纏るければよふ任せもあまの空を年艱瞻めららら申すや情願

稱あま本甲斐もなぬとまの聖在玉臍左界の戦ひ敗れと波路  
 沈まの風の便りも言え折のき方もは歎きと俱小死すくもし  
 鬮されて残る世一般盤纏も物も容赦の為用盡くせ絶望を人の情は歌  
 船のほ夏身は室津海の底より深に宿世の罪障哀れはひねとひひと  
 よと泣沈め死四郎も亦嗟歎とよよ倍る你的薄命を慰るよも免  
 陶氏の陣殺のれも京師の世の風声ははるくぞ知る介るよ這回る地の  
 多の是私の所要あは迺主君の使也大内殿へ年始の佳儀を述  
 するよふよとて御向共侶のあへ來る酒の遊小一人馬里小路賢房  
 卿よりこれ亦大内家へ遣されるん使也其甲と呼らるの旅亭を俺と一  
 所小を彼人大きく酔く還ると馳と熟睡とくるよ町宿され居も易ら  
 然るよの伴をも俱せぬとていふよ來つる介が京師小在り時相見ふ日



阿夏落魄市街曲于圖

出像第十九

この図前巻小漏た  
ると補ふ本文と異

擬效 桃園 結孔懷 須知天 意巧安排 乘時事業轟天地 未遇身名困草萊 介裡光陰情不已



難中知過果奇哉 從今母子分 夷碓 回首 雲山 天一涯 旅のよむまふ 系柳乃名









折紙附るる刀と時服一襲の沙金五十両を添く賜りて是併に君の  
 見計ひよるものるれ時目の面目の身余り一銭のまうて退りぬれぬもの  
 地の所要果す五隔妻の比去りて去りて賢房脚路の使と勾當を  
 まる程小彼れ使のりりい垂柳橋の邊ありて名を酒樓ありて安れ京師の  
 果す誘ふ今より其処に赴き俱に酔ひ盡すべしとらりて亦路の向寄り  
 所要われ共侶の旅亭をゆてあふ来りて違りて客歌妓さありと  
 りい召登りて絲歌を聴くその面影も声もあふ屋阿夏ふより肖るをれ  
 めぬぬれぬ進止まらぬその名を夏と呼ぶれぬと違りて  
 まらぬ乱酒の最中一夥多る人小憚あれ樓上ありて同も果さば  
 戻りて主人の問へ良人たるを珠之奴とて呼ぶる獨子ありて他野を  
 夏流浪の顛末の首様々と報られぬと疑ひの半分の解け

春の雲まれくとも水と人の往方の定め多く東路中とのまばゆを西の都小在  
 明の月も優てまひまひ十稔絶れ恋風の復這浦の起んとらふ身中を海  
 妻もあま相譚より縁を結ぐ昔里へぬく火らんむとまひまれば此も擬議  
 せも軀へ主人を媒妁せり娶るといせり一豈一日の浮氣もんや赤心その  
 折れも休小知せんと思ひい美のあれが陶氏のうかへ俺も一面の交りあれ悼  
 めるあまあも道者日小疎く流る水去りて返らぬ休年来彼人を思ひ  
 如く今よりと五口併て誠ありて天中地中誓を立て後の世も夫婦ある  
 らん後る飲甚麻をどと問つ口説つ風流士風流女子の色深死情を花のか  
 ら咲散らまると相譚ひ阿夏いと遣瀨る感涙を稍拭ひ斂る頼  
 らる辛踏ぬ然もまも思れぬも否といひ辞船の目取上の川も遠く  
 ぬる陸奥る昔里へ伴んとまもまも神をひける誓言十稔の夏苦を



慰め侍の然けれども伯勞町客店に債あり珠之成も彼処に侍るに  
 志死と問せもあまの義も心安のべし御高主人の云々と告られよと既に  
 志死の方寸も分別ありし幸ひ大内殿より賜さる金あれば客店に債を  
 償ふべし又珠之成の侍と共小京師も還りて介后亦せん術あらんや  
 今より吾見とて舊里へ行くも數一かぬるも如右にせむ事あり  
 親へ理不強古代氣質の翁は侍に這回主君より賜さる女房よりといひ  
 眺ゆる障のありしはこれ総角子と告まらざる外聞の妙  
 る親も戯けたる怒りて口舌これより起すせん然るに侍の爲も珠之  
 成の爲もさかり因て且渠がうへ主君も願ひなり姑く京師を遣し措く緩く  
 家小召さるし腹料の是の事と這回侍を伴ふ賢房卿の死使と共に  
 還りのころ吾侍の病も假托し且彼人を急して中遣らんとせむ事ありの事也

後中あべとの小阿夏が教ひく縛送もるは身身の計に京師の女舊里  
 ほ小珠之成を那里も留めく豫て知られる西の御家  
 ついでに陸奥と憚りの関の門鎖と許され侍りて侍るも立心  
 安かりん霜の極子雪の松左も右もあは愛顧して浮世春も遇一の親の  
 るに渠も亦幸ひ侍を侍らぬと瀧心む言葉の露の間の最葉も相譚し折  
 り忽地階子の轉む音も主人もゆび階に來る奈何那も商量の整  
 ひて侍と問はる圓居も入る程も阿夏も急席を譲りて親方さる  
 大の死客の京師も目野西も御内人辛踏ゆと呼さる素も由縁の侍  
 事も死顔瘡の迹耗もて面もさるあはれも惑ひて侍らぬといふ又四郎を  
 極小辭を更めく只今阿夏も報へ如く吾侍の兼頭卿の死使を奉りて當  
 國主へ参向も辛踏死四郎寧成も主用も縛果たれ向夏母子も相伴ん



といふ帰京の商量決其者ある渠の素より脱れが死由縁の良ありとも相別  
 きより十稔あまの送小信絶れぬ窮厄を極小由り。まのまも知らざる  
 小幸ひして資られる和敷の使氣感する小あまのありのそりる報ひするま  
 とも噂るべくもあらず。旅のあれ思音楽任せ陶氏在京たり。時友垣締び  
 一ゆえあれが懐蒼男長談小あまを小夜を深した。といふ主人も終ひて原来  
 京家のあ使用する刀衾們中々も懐了然る方と知むと大く無礼を  
 仕ぬ彼子とあまを挿了せるとも本錢を容るるあまのあまの誰の謝義と  
 受ぬ死幸あるよふかど飲の三呼愛うと祝ひ復不無を勧め光四郎始笑  
 坪小入りく阿夏と共に献つ酬れつゆふ不無を巡る程か必真夜中になり  
 光四郎の別を告て客舎小又らんとひけるを阿夏のけら主人も林あめ路  
 次程心のこる。今宵の小曉ひひて翌の未明小又らせぬといふも憎がた

素より望む所るれども有敷系小早ま後以難て幾回とまきまきあつてかうな  
 その議小任けりあの時了髪は皆睡りて呼べも人の来るのきられ主人い  
 や不盃盤とさ斂めく辞去す阿夏の臥簾と布儲け光四郎が為枕茂  
 薦く絶て久した慾鬼の快樂を曉る天を恨まけり烏虎痴る哉這狂漢壁  
 論あつて歳とま彼花を偷むが為の枝を折るの己が身の先柱を虫  
 ん然れが海人の股を辟刀ふその珠を藏ま為替女の脛を踏去その蚤を  
 拂ふが為の三人をこれに笑へもその醜體を羞むる思小近。且舊る陶器を  
 愛ものあ欠をと瑕とせむ好まき敗衣を買ふのの新したをのく妙とせむ  
 飽温の飢寒を差次名利の事と憂る皆惑ひの。是足筆のまらういと  
 惟しな世小迷情の病あはりの善悪の差別小聞く驕日甚は患あはりの  
 その身を忘まき他の悪をせまき欲ま人の嗜慾のまあぐるは阿夏が恥る死



いふも足らぬと元四郎が事を好ましく世の捨物を据へる彼迷情の病あ  
はと敗衣を好ましく被拔と稱へ且その直の廉めを堀出ると類するべし。

青蚊厄を釋く子母故御小還る  
第十五面 黄門情を察しと艶童西家小留る

却説辛踏先四郎の黎明の比旅亭小還りて寤寐不臥篋篋に入らる。一野  
るは使者の心も知らず起て元四郎を呼覚ませ豫て計りし元四  
郎答て不白某の昨宵より酷く腹痛を水泻をせしければ通霄寐も  
睡られざるに憶ふまの宿醒ゆく軽症おもへれども兩三日も保類せぬ長  
途の旅行の心も然りと定めある歸京の日期も困ふと御邊も後ま  
ぬらんを辨の宜なるをわが俺へ申眷念せしむる歸路も赴たぬと小件の  
使者眉を蹙めてその心算をいふる某を用ひぬ然城中より告ぐ醫

師と招くたといふ元四郎は某の財あり醫師を請ふ及ぶと  
各々主君の為小まると御邊愁小構づらひ猶豫せぬとある俺心安  
らむを願ふを帰京と俺邸中の雜當連下と傳連あひひら外は  
免るべとれをせぬも至とせと速本復せ遠くは趕著く俱々京師へ還り  
てんが美をあらぬをいふとこの理を沈吟し領なく俱々京  
師と出ると一野の病臥をゆる捨て歸途と急ぐ心を朋友の義小背く似  
たれと私の旅るぬ主用るといふせん某醫師ありぬも血色を看く猜を  
ほふ実小霜露の病小を日るる瘡りぬべれ豫て共共侶小立去るべと  
契せしむる御邊病臥の趣を傳連のよりもあれはけし書起小まかれを猛後  
者と急ぐ容共衣を整く元四郎が後者と宅旅亭ののれも者病某  
餌のりまをも叮嚀よ心つけく別まを歸浴小赴たけり既ぬ元四郎の後を



るこれども人の世んのをく。去の日の猶も臥てり。叔次の目もさり。病著る  
 名瘡りたりと。後者どおく博労町。粟津屋の赴は。あ。祥八の對面  
 多く姓名を生り来意を告ぐ。阿夏母子に由縁あれ。那窮阮をるに忍びむ。  
 その故の箇様々々と候。鯖樓ゆくゆく。阿夏はあひ。絆の趣。渠等が客儀の  
 舊借の償い。と。且珠之友をも共侶おく。京師へ還らんと。京事情を  
 辯舌。爽の演。祥八は。歎び。い。る。異議。た。特。主。ま。を。られ。  
 京家の使人。る。よ。と。告。られ。より。駭。た。怕。れ。た。を。教。待。大。く。る。を。妻。あ。共。お  
 口誑。と。告。て。珠。之。友。も。信。々。と。報。て。无。四。郎。お。遞。与。け。り。是。より。先。小。珠。之。友。の  
 母。の。阿。夏。の。消。息。と。件。の。吉。の。趣。の。箇。様。々。と。知。せ。し。既。お。ま。の。は。ゆる。り。け。ま。す。  
 放生會。小。木。桶。の。魚。の。讀。經。を。聽。る。心。地。は。是。より。と。无。四。郎。が。次。見。と。眉。を  
 心。侵。り。く。あ。ら。夫。婦。お。使。れ。む。動。も。ま。れ。外。お。ま。て。彼。人。邊。と。候。程。小。果。し。と

无四郎が来れば呼ばれ。随小坐席を造り。恭しく對面を當下无四郎を  
 傍に招き。近うして。這面母親共侶。小京師へ伴を來る。よ。と。親。心。切。小。説。示  
 して。額。髪。を。押。拵。て。相。別。れ。り。十。稔。の。前。の。你。が。三。才。の。比。の。け。れ。は。俺。在。り。も。知。ら  
 ず。け。ん。母。は。再。會。せ。折。は。你。の。も。詳。し。夢。見。日。來。の。艱。苦。さ。を。あ。ら。ん。今。より  
 吾。俗。が。後。見。多。く。人。の。為。小。門。を。掃。せ。下。心。づ。く。と。い。ひ。耐。心。の。愛。を。し。し。珠。之  
 友。の。恩。義。を。感。ず。と。不。快。備。小。侍。り。り。然。程。小。无。四。郎。阿。夏。が。客。儀。は。舊。借。と  
 祥八の向う。金を取ら。別は。准備の。一封。金。の。二分。飲。三分。謝。義。と。い。く。阿  
 夏。が。為。り。贈。り。ぬ。も。祥。八。の。薄。氣。味。を。さ。ふ。敢。又。これ。を。受。ま。客。儀。も。之。分。之  
 一。を。輸。り。ぬ。実。を。書。て。遞。与。け。り。絆。を。送。る。果。め。无。四。郎。の。祥。八。夫。婦。の  
 歎。び。を。述。珠。之。友。を。推。し。候。鯖。樓。小。赴。は。昨。今。の。首。尾。信。々。と。阿。夏。は。其。説  
 相。歡。び。主。人。の。沙。金。三。兩。を。贈。り。媒。妙。の。謝。物。と。返。ま。を。思。ひ。こ。の。小



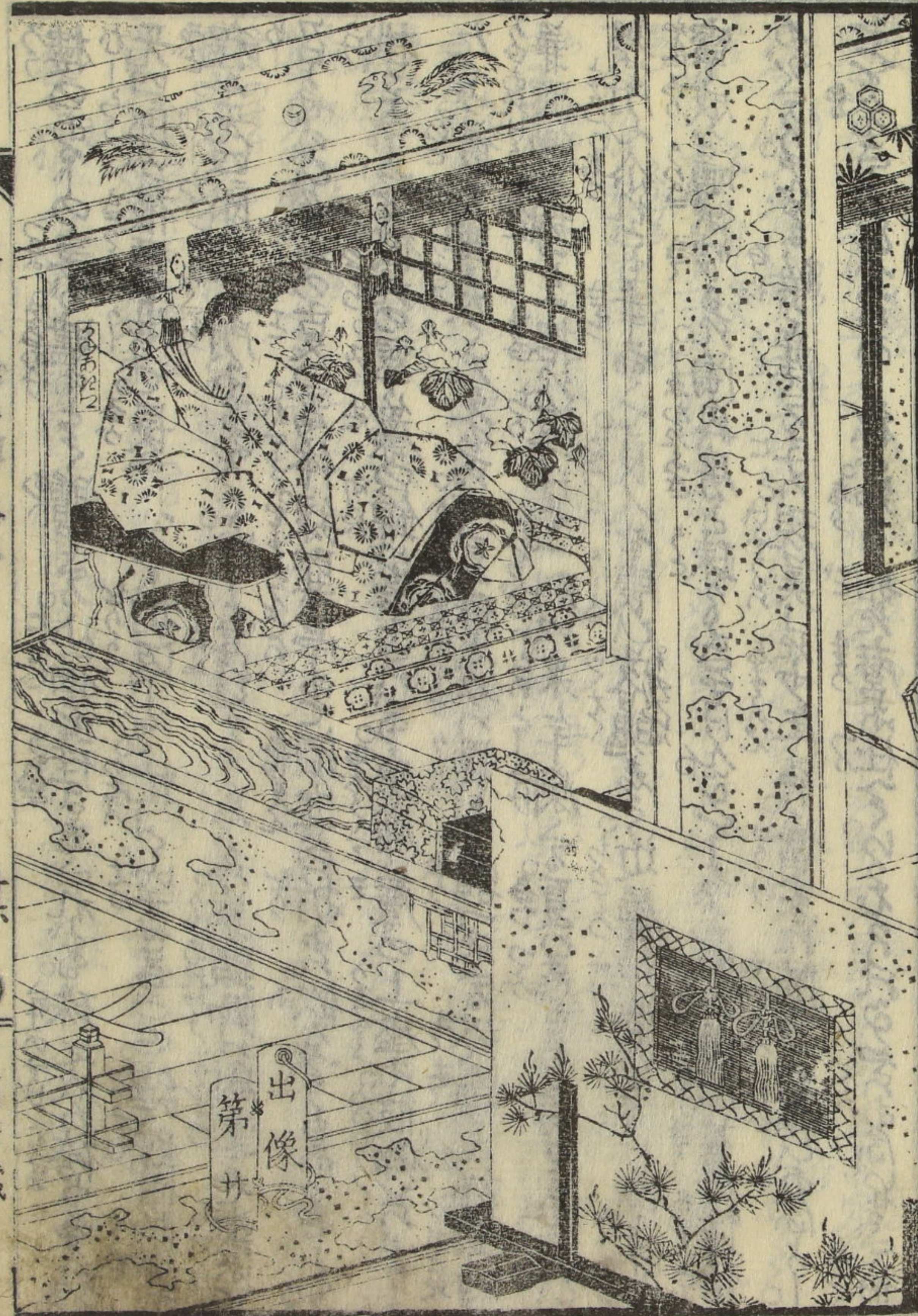




うさ 憂患の堪ざりけん山口の敏基華と依りて去歳の春その子と俱に周防に赴  
けたるは由縁の入り世と去りて盤纏乏竭果に進退其首末究げず無  
權との橋の上より身を投入せし折は某たるは邁わたりて忍びを推留め  
容子と向へ別人をむむむ相見一京師の歌妓件の夏でひし渠は陶興房  
ゆめ陳くふゆりとのふく君ゆめ知食たれいと哀れの弥増て意見滅盡一  
死と禁めの子珠之共侶の帰京の船うち無しとの地の相伴ひひたさ  
れ死使を奉てり又さ陸路るふ俱に死の共ひひを船中を親疎と  
る兼合さるも勘うふねが如右計ひいと実言虚説らち難て密安ふ生口さ  
き兼頭卿のひたを不便多るなり。舊里に居親族ありその夏が子と  
り不きると問せぬいさい京師の渠が故御るにも親類もるも渠は友あり  
ぎとまうま又夏が子と珠之共の侍稀る美童中へ年十二四のやうのん

思おもてえむひが某が代とて召使せぬひさあは彼等の幸あるもも賊死  
のの子とどどの中上難ひひたあをくまうまあ兼頭卿と領家の今戦  
國の世のあれが一其の素姓のよむ世世もも言られや夏が子と  
林と嫌ひ死のあもあはとれはさるは彼少年の襦袢の中在り比陶興  
房が愛せりよとれ人信まぜりとの最長周防に赴けり彼兵房が庇ひ立ん  
とあひひもあつらんよとの比左界の戦ひ兵房入水のせえあれは彼以不  
便之夏共侶の召とせよ密安ふ渠等となく汝がまうま如くまうま首置くとも  
けしうのあはだあろるる飲と叮嚀し示り多し無四郎の終ひ面露れと言受り  
は退出たり然る辛踏无四郎の目五條へ消息して君命の趣を阿夏珠  
之の母に告ぐ阿夏はゆる珠之共の終ひと大くまうま俱に身のかつめ  
この鑑ひて次の目五郎が宿所は来たけり阿夏は山口と辞し去ると候期





美山堂金三郎卷五

十六

出像  
第廿



可夏  
之  
珠  
之  
多  
兼  
謂  
あ  
顯  
卿  
小

美山堂金三郎卷五

珠之



樓のあつきの妻を贖ふとて贈する小袖を柱はあつれども珠之女の袴もあつれ  
 元四郎が被登借して長きうると折返して忙しく穿せるとも緯既小敷正ふ  
 程元四郎の君所あつりかかと其衣まうあつり兼頭卿の用室を乗ホ  
 召せぬひるその古夏のを体縁異亭の酒宴の折出似るべうもあつり  
 掛つたな彼此の翠簾の錦いぬも重席簾の上座の彼卿より  
 たが最も尊大くええの阿夏珠之女の畏を額つたる伏進の登時  
 兼頭卿の頻りに招き近づく一別以来年闌る夏の恙もあつり  
 其所へ介れども幸あつて良人を喪ひ格別あつり近屬他御あつり  
 寧成の噂も陶真房と疎くさるけんのうも懐舊の情禁  
 めぬるも産する子の現美一足少年の當家に隨身の懐いあつり  
 とどろくとのあつり知る如く磨磨仕つりあつりあつりあつり

野もあつりあつり且つあつり留措て左も右もあつりあつりあつり  
 夏は優てる弱う今をめて在りもせぬ女子の摠て素姓あつり氏あつり  
 王のあつり昔語あつり目あつりあつりあつりあつりあつりあつり  
 夏はあつりあつり阿とあつり平伏果敢あつりあつり折る阿夏  
 小案内をる画壁の下侍り元四郎急進あつりあつりあつりあつり  
 さあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
 親類もあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
 某身の暇も賜や故御へ還る便路も送る届んとあつりあつり  
 珠之女のあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
 さも安心仕る須弥も高は御恩あつりあつりあつりあつりあつり  
 たく精しくあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり



昔里へおとゆた。妻あるまどくもあふらん。これ初より事情を誑くもあふ。今の  
辨頭れう主の使の立ちあふ。女子と俱とあつまる。大なるぬ越度ある。まふ  
との子と女ね置く。身と振まきせまき欲き。伎倆の程を鈍ま。れ信と罪ま  
べののされも。今の世の災賊と。忠信廉直單る。が理義を守ると古物と唱  
へて笑さる。のあま。況這寧成の年來よくこれ仕へ。這回の外は行ま。然ふ  
より渠が随意暇と取ら。今に至るとの罪と糾弾せ。誰の仁者の所行といふ  
べ。曇る陶真房が夏尔浮名の立ち。と痛痛くあひ。今又ゆるゆえわれ衆  
人酔き。醒ざれが粕を舐ふ。ままことあふ。と臆度。冷死長袖の寛仁大度隠  
惻き。心は秘く。おめめ。知れもあふ。ぬ面色して現寧成が。ま。趣夏が。あ  
便宜ま。む。文屋康秀が。二河椽く。赴く折小野小町。色衰く。あ。けるを  
誘引く。俱とあふ。といひ。多と小町の推評。も。ひぬ。早と。根と。え。

ゆそ水あふ。つるんとを。と。後ひ。と物。え。康秀と寧成と文守の  
異れ。訓の似。夏。小町の後身。秋。奇。と笑ひ。の。无四郎阿夏の堪。あ  
且。怕れ。且。恥。て。又。の。も。あ。り。け。且。く。と。兼。頭。卿。又。无。四。郎。子。宣。き。う。豫。て。の。約。束。る  
る。ふ。も。汝。の。身。の。暇。と。取。ら。ん。ま。故。御。赴。を。親。の。心。を。慰。め。よ。珠。之。女。の。ま。由。そ  
近。習。の。は。預。措。ん。有。右。者。夏。が。心。の。安。く。よ。ん。と。討。ふ。便。よ。ん。寔。由。不。測。の。再  
會。の。う。又。別。れ。る。西。東。都。の。花。は。鄙。の。月。相。見。る。工。の。難。く。べ。み。づ。く。愛。く  
珠。之。女。が。誑。も。且。と。俟。ひ。う。今。の。も。夏。を。寧。成。局。案。内。と。物。を。ま。ま。に。宣。き。阿  
夏の。類。り。の。感。涙。の。進。む。と。袖。の。推。林。の。珠。之。女。共。侶。の。无。四。郎。が。後。の。跟。く。退。死  
出。る。あ。ろ。の。中。に。兼。頭。卿。の。世。の。稀。る。粹。の。又。粹。粹。中。の。粹。る。君。を。と。感。下。け。る。

第十六回 三碗の清茶暗ふ元盛を動せ 一箇の湯鉢克く國友を悦む



辛踏元四郎盛成の君命の首尾も優く珠の之を留置しとの身の後で願ひのまふく致仕の暇をあらけれ天の秋び地の喜び阿夏を五條の又遣はしの障りのあらうん程もあらう京師を辞し去る一とく文衣と急に准備もも整ひふ兼頭卿小見参りて洪恩を謝しなり朋輩を別れ告ぐその明旦五條を赴じ屬日阿夏を預置る相識の東西を贈りて準をおく故御のあらう絆の趣を告るまま阿夏のあの日の起行を逆元四郎の報をけき他事を用意を昨より俟て且元四郎が世才の長く終備足でも後者のあらう費を行麓の驛々々馬の肩にのくと尋思せし馬を牽き来にけし誘を俱にたち出けり珠之の又日より西殿を留りて近習の子舎を在ける時の暇を敷の下まま送りけり子小教也死親をねと阿夏の別の悲をさふをいと

のと縁返し只云云といふも果敢る現生れより昨けはま片晌も離れと苦樂を俱にあらうける母の子を珠之の又桓山四鳥の懐ひあり哀々たる涙の玉恋憐る別の觴争ひと骨肉の情状言外小見れ慰むべくもあらうと元四郎諫將木と遠小袂を分わけり何時とあら瀬と揃られねば親のあらうとけしち仰せる尿を又送れる子のあらう人の霞にち紛を遠くあらう馬の鈴の果のあらうも惘然と目送りけり人の子たらぬ親の告むと取女を非礼の礼とあらう野合に所をゆる男女の情慾果せる現身を捨る溝壑を一の子と棄る敷の下あり知るも知らぬ逢坂の後人話柄あらう元四郎阿夏が話是下に是よりと珠之の又兼頭卿の策も近習の弱輩に後よて日毎に諸社を見習ふ萃洛の夢のあらう知らぬ田舎員のあらう左不就も右不



就ても不敏なる節もて只笑ふの事と朽をくちまらん心を切  
 ちまを君よは素より愚魯なるべし幾程もる會得あくとそのひさる  
 進止まき優美ゆをりよける是より兼頭卿の珠之友を召出きて身邊  
 近く使ひのよまらざる主の機を攬て命せられもその意を悟り誨えされ  
 どもとの義を辨ふ特小怜利は少年なれどもその性便佞利口を進止  
 表裏あり且容貌は柔後ゆく女子めたる艶色をもその眼中に熟無を  
 帯く角睐睛るも世に異なる善悪邪正の今より多し料知されりる  
 然どもその若成長をうんぬのふりてうら為るる死倘禍を惹出まら  
 ちもあはれ膝を噛とも後悔其処におかすえと遠離るる優とあふとと  
 心小疎まのともゆせる愆あるもあはれ追出さるるまを以煩ひひら  
 有如之程一日管領高國の權臣小香西四郎左衛門尉元盛と喚を

との稟来るる死のありと兼頭卿を訪まわらせけり這元盛が主るのけ  
 武藏守高國の民部少輔政春の嫡子たる家老の庶流るるごとと近  
 曾京都將軍家廢立の美よりて管領小補せられしを  
 威勢肩を比るのる。家臣より居る中よ件は木島元盛と波野備前  
 守植通と柳本弾正忠國友の同胞る。這兄弟二名の丹波一國城分領  
 あり權威とて主の高國を減らむ聲言の録倉管領の權臣る。長尾  
 太田等とせ稱く内管領といひ小相似と植通の丹波る八上の御在城  
 元盛と國友の在京と主の執事たり就中國友の初少年る。時容止  
 荷々りけり高國を寵愛して會を俱せし夜より既ふし今も  
 ちや壯年なるたれもその餘波を寵衰む然ふよりその年来權を弄  
 ひ威を振ひて兄と兄ともせざる。元盛憤憤りて牆を闚ぐの懐ひあを



され華洛も戦馬も荒方人食安危を定難く鬼胎を抱く折るれ恨を  
 秘して言ふ出さる聊歌を嗜するは卿上達部小親を資かせると尋  
 思ひ日野西殿へも疎くも訪まらせむ。暗譚の時を移る日にも  
 又同話休題の目の中納言兼頭卿の元盛小對面と云う。譚ひる程小珠之  
 又の茶の給侍も元盛小薦と云う。西面及び元盛をくると平介  
 ありぬるも那少半の後來の扈從達より彼を何と召すや。ん是ま  
 足も孰さるし美童を火と合口大なる問う。兼頭卿領に渠と末  
 松氏ゆく珠之次と喚れり。譜第のめは子ありと近屬まぐ侍たは  
 舊臣寧成といふの由縁あり。狐と皆えり。姑くこの代としてあふ召措死  
 ゆるのそこの心さぬ愚魯なるを。如美童るれ何処に薦遣と武  
 弁の家臣ふるさるといふるあねども。便宜と云う。世も薄命なるの

りれと微少小報の登時元盛もや。那末松珠之次と云う。てヨク得  
 ぬ美童るれが主君小薦あり。その左右の侍をある弟國友權と奪ふ  
 あり究竟の力入るんと云くも胸小計較る心ともなく膝を准めて賢慮仰の  
 ぞくる。在下預せ奉す。そのも仕らん。あはれと云う。と辭せり。と  
 問う。兼頭卿飲び。足下り。磨ふる代。渠と執立る。あはれと云う。  
 彼身の幸ひる。さうと。馳て珠之次を身邊近く呼よ。侍の縛の趣云云  
 と説示し。あはれ。汝今より身も未だ。香西氏小後。あま在る。八入。あはれ。漸  
 漸に福ひ。あはれ。勉よ。と諭し。あはれ。珠之次。席と避て。あはれ。元盛。身の  
 飲ひを述べ。あはれ。亦異議のあはれ。兼頭卿。あはれ。元盛。乞小  
 任。あはれ。風。あはれ。珠之次。あはれ。遣志。あはれ。約束。あはれ。元盛。あはれ。飲ひ。あはれ。  
 固く契。あはれ。退。あはれ。却説。あはれ。松珠之次。あはれ。香西。あはれ。宿所。あはれ。赴。あはれ。身邊。あはれ。使



俗、亦トク主の機と攬中と意小愜むと云ふ。元盛の初集高國の  
 薦揚て柳本彈正が權勢と折んと腹策と云ふ。男の色心感便  
 佞利口小湯され。惜死の事と云ふ。愛する心ふくむ。放遣てくもあふ  
 され。豫の密計空とる。夜毎臥房は。遂に龍陽ありけり。現  
 戦國の風俗也。男の色難姦の嬉樂に耽らぬ。珠之友が鏢致  
 人よ提れ。且と媚て世才あれ。元盛のく。寵愛して。姑くも左右とる。ま  
 初高國の高國へ進らせ。と云ふ。己の言ふ出さぬ。あられ。珠之友まら。知る。一  
 の。主と不足。必とる。齒を津。紅粉を施し。身中綾羅を被飾。過  
 世ありけり。飲びも漸く。心侵り。その意小愜ぬ。あられ。あは。執成。罪  
 る。追退け。又よく。阿諛あり。あられ。功る。主小。薦め。謀と増。と。往。あ  
 け。元盛。陪臣。の。と。又。丹波。數郡。の。地。を。食。と。且。管領。の家。宰。を。ま。

下風。立んと願。あ。の。必。先。珠。之。友。東。西。と。贈。り。好。を。締。と。の。執。成。頼。ぬ。  
 一。是。一。箇。の。少。年。後。類。光。黨。阿。容。々。々。と。く。る。頭。を。擡。ゆ。跡。  
 子。瑕。が。衛。君。を。愛。せ。れ。鄧。通。が。漢。皇。の。寵。恩。を。誇。り。と。和。漢。の。差。を。  
 あ。の。感。溺。濫。賞。異。る。人。目。覚。く。思。ひ。けり。と。程。の。之。稔。を。歷。て。  
 大。永。五。年。の。夏。肆。月。香。西。元。盛。が。主。の。け。管。領。武。藏。守。高。國。の。四。十。二。元。  
 厄。う。ま。り。猛。祝。髪。入。道。と。松。山。道。永。と。號。けり。後。常。相。と。改。の。教。  
 び。と。う。え。と。元。盛。君。所。へ。出。仕。し。暈。昏。の。來。ま。け。が。その。面。色。常。に。  
 かく。只。顧。歎。息。と。り。珠。之。友。誣。す。く。け。御。館。の。御。剃。髪。を。祝。席。と。  
 開。れ。酒。宴。を。賜。ふ。と。傳。せ。し。め。の。愛。た。死。折。り。あ。ら。る。の。ゆ。ひ。て。ち。惱。せ。  
 多。余。ん。あ。ら。る。ゆ。ひ。と。問。れ。元。盛。親。と。更。め。さ。ま。と。ま。ゆ。ひ。御。酒。宴。  
 更。果。く。都。鄙。賞。四。罰。の。君。羊。議。あり。汝。の。も。知。さ。る。阿。波。の。三。好。希。雲。亦。ハ



希雲三

好子

前守長輝

入道長光

養長光

守長光

子修理大

夫長光

希雲三

好子

當館（高）。同宗多。前管領澄元主の執吏の老黨たる當館と  
 擊退之主と京師へ還えといゆ。永正十七年庚辰の春正月大軍を催  
 あり。遂小京師へ攻登り。一旦勝利を得る。この年暮春の比に至りて三  
 好い。く。く。肩て降参を志し。その子三好孫四郎長則。菟川孫二郎  
 長光ホと共に。郷首を刺せしむ。降参を許容せしむ。あまのまじひ  
 たる當館の元計ひを三好の黨多々怨む。鐵を磨ぐと管えし。故にい  
 比左界の城を敵小畧られ。四國の通路不便し。ゆ件の希雲を不  
 義の先兆。那閉戦より前一年。永正十六年。渠が為の君宗より。一隊の大將を  
 執立。淡路守成春ぬ。執立。天罰を減亡の勢あり。希雲  
 居士。嫡孫を。薩摩守。元長。理義。聰。良將。私の怨哉  
 希雲。當家と和睦のあり。これに比回者となり。あれより。或知は

由多小館。薦め。阿波へ使を遣。元長を招。某。の義。我  
 奉。彼地へ。彼。向。使。元長。疑。這。和。議。引。む。こ。と。を  
 左界の城へ返。下。然。此。方。小。利。あり。時。得。失。以。易。い。故。は。皆  
 と。詳。演。一。館。志。く。領。既。許。容。の。色。多。う。年。来。不  
 和。身。り。弟。柳。本。圃。友。の。議。を。拒。説。破。す。三。好。の。脚。家。僕。小。等  
 妾。を。今。小。腰。と。折。め。弱。し。示。さ。り。や。さ。の。狀。を。元。盛。が。執。成。ま。う  
 と。敵。小。香。餌。を。食。さ。れ。主。と。賣。ん。と。欲。さ。欲。あ。ら。り。く。ま。い。と。声。苛。り  
 く。ま。う。去。る。館。の。彼。奴。を。感。さ。れ。遂。小。議。を。用。い。金。刺。面。目。を。費。して  
 立。老。不。も。多。退。り。者。他。人。の。事。れ。れ。も。あ。れ。弟。の。為。は。辱。ら。れ。と。祈。所。免  
 懊。惱。胸。不。満。し。ま。ま。歎。息。ま。る。之。慷。慨。事。わ。あ。ま。ま。と。叫。言。の。ま。り。其。を  
 珠。之。父。ら。ち。愛。く。昔。も。同。胞。不。和。多。う。頼。朝。義。經。を。首。と。し。殺。入。り。へ。下





けさ  
 京畿の武士高國の  
 祝髪を拜賀せ

出像第二十一

吉國入道

吉國

吉國



吉國入道

柳屋



されども運の尊卑ゆへに余兄の弟小及ぶく後由佳くこれあり君同胞の故  
 中も余君以外事と當り舎弟彈正四友の内史をのしと寵臣たりその  
 職役小甲しきけれ胞兄弟和睦ありて内外をま理めぬ衆人之下下風は  
 威勢三好の等しや此脚ゆつむして年来不和まのひの甚慮る故小  
 ひと問れ元盛駭嘆あつ後方と入る声を潜めて通微妙も問つもの哉  
 四友が動まれば無礼の言と出た實は以わとこの抑遠山松と名けり  
 湯鉞の珠光が遺愛の名物ゆつり家小秘藏ありと四友が欲しと云ふ  
 正屋をり一と嫡家相傳るまあり決して与へられ凍まのり痛恨ま  
 不快の色を見し是も今に至るも骨肉竟睦の心を四友が整理る  
 らまると告るさうらちつ珠之友のりもさ然なるの事かか真慮成  
 惱しゆと速まを湯鉞贈りて和睦の鳥辭言く思ふ其後

処へ赴はく和議と整へんとこの事もあま盛呵々とうち笑ひく愚珠之友天  
 地の反覆まるとありとも不義の弟小を降て市も親より譲らる得が  
 代貨と贈らんと敦圍猛く徴ま珠之友又推返して仰ふゆいとも世小最  
 稀る黒迹道具ゆつり人を誇まると泰平の宝あり縮る鎗狂  
 へるゆも大く劣りと戦國の要ありまのりあま贈り遣く胞兄弟和  
 睦あり河波へ使節と命せられ左界の城をゆめへ左界の都會の福地  
 也遠山松の湯鉞よりその利萬まるとの加旃三好の黨恩義を感  
 まるとあま贈りものも言らんと狐疑く便宜と失ひぬ御後悔のやゆん  
 賢慮を面しゆんとの願くすゆいと阿容たる氣色もる諫め元盛有  
 理と初々曉ゆて感まると大まると倍する汝が意目その誤小後へは  
 とも年る月二の小孺子がよく四友小説得んやとのりま微笑て其近



江の在りし時師の坊小後ひく和漢の故事を粗く習ふにむ。武内紀宿禰の  
年十二より比天子の密勅を奉りて北陸道と巡歴するの邪正を問政して治  
めく還りしより一とを又唐山の素の甘羅の年甫九歳より一も呂不韋が  
為小使して大功を立りしあり有知之の年のみ少むるは才を擇んで任用すべしと  
のれ師説もこの機を臨み變るべしと御本意を達せん胸中は覺あり枉造  
しゆひと頻り小請めて已ざりぬけ盛を極く領を年倍するは才幹る多  
り下と比しむるもこの第一權を誇りて人を凌ぐと狗子の如く我意を暮かり辯説を  
よく信容せしものあり等閑を思ふと叮嚀を極言す決の目伴の湯鉢を被り包ま  
す宮へ歸りて珠之及びこれを齎し心利る後者と言ひ謙てを遣はける畢竟珠之  
及び柳本使しく後の話說甚麼を言ふと次の巻の解分はを聽かす。

近世説美少年録第二輯卷之三終



